

XenosagaI・II - 第十七話 旅立 - Abfahrt - 上

ケイオス：――――

ヴィルヘルム：――久しぶりだね、イエオーシュア。

ケイオス：――――

ヴィルヘルム：こうして、また君の声が聞けるなんて、嬉しいよ。しかし――
傍観者として時を過ごすとは心定めたのではなかったのかい？
いや、監視者か――
木星動乱や封印者恐慌、そしてミルチア紛争の際も、
僕がE.S.を与えた者のそばに、君の姿があった。

ケイオス：――――

ヴィルヘルム：だからといって、君は直接、僕のところへ接触してくれることはなかった。だから――
――嬉しいよ、イエオーシュア。

ケイオス：――シオンたちへの干渉が、ここまで露骨なものになると思ってはいなかったからね。

ヴィルヘルム：干渉――？

しかし、彼女たちには力が必要だった。そうではないのかい？
僕としても、大切な社員をむざむざ危地に送り込むのは忍びなかったものでね。

ケイオス：――君は、また繰り返したいのか？

ヴィルヘルム：なんのことかな。

ケイオス：かつて、E.S.が招いた悲劇を。

いや、”彼ら”がアニマの器と出逢ったが故の悲劇を――――

――――

ヴィルヘルム：アニマの器――あれは、もともと君のものだった。

だから――そんなにも思い悩むんだね。可哀想なイエオーシュア。でも――

時は必ず輪廻すると決まったわけではない――

かつて、そう言ったのは君じゃなかったかな、イエオーシュア。

ならば、迷うことはないはずだよ。

もう、僕たちは永い時を過ごしてきた。君の決断、楽しみにしているよ。

ケイオス：――――

旅 - Abrahrt - 立

アレン：ああ、やっと着いたあ。曙光に帰ってきたの、百年ぶりみたいな気がしますよお。

シオン：そうね――――

シオン：じゃあ、私たちは軌道上の曙光にあがるから、ここで。

Jr.：ああ、いろいろ世話になったな。

モモ：シオンさん、私――メール書きますね。

シオン：ええ、待ってるわ。

ジギーさんやケイオスくんはどうするんですか、この後。

ケイオス：Jr.の用につきあうことになるのかな。

ジギー：こちらも、モモの身辺警護の任務が解かれたわけではないのでな。

シオン：そうですか――じゃあ、みんなで旧ミルチアに。

Jr.：ああ、アルベドがなにをしようとしてるのか、まだわかんねーけど――

俺の手で止めてやらないとな。

ジギー：あの地は様々な勢力の思惑が複雑にからみあっている。

身軽な立場の者が先行する以外、先手をとる方法はない。

シオン：――――

ケイオス：シオンは気兼ねなく、本来の仕事に戻ってよ。

これまで力を貸してくれただけでも充分なんだから。

シオン：――――ええ。

ミユキ：せんばーい！

アレン：ミユキちゃん！

ミユキ：お帰りなさい、先輩！ またお会いできて、嬉しいです！

シオン：なによオーバーね。二局で別れたの、ついこの間じゃない。

ミユキ：だって先輩、大冒険の連続だったじゃないですか！

グノーシスに襲われるし、連邦叛乱容疑にまきこまれるし、大気圏に落ちるし、軌道上で戦闘するし、アレンさんの面倒までついてくるし！

アレン： ちょっとちょっと、最後のはなに？

シオン： うん、でも、無事に帰ってこられたから。

ミュキ： ええ、私が曙光に上がった後、地上との交通も規制されたって聞いたから、心配してました。専用シャトルを運行させちゃうなんて、まるでVIPですね！

アレン： そりゃあ、ファウンデーションや第二ミルチアの危機を幾度も救ったんだからね。

ミュキ： よかったですね。そんなすごいウヅキ先輩の便に同乗できて。

アレンさん、ラッキー！

アレン： —————

シオン： 地上では戒厳令が布告されたいけど、曙光ではどう？

ミュキ： そりゃ位相空間が出現しちゃったんですからね。

要するに、十四年ぶりに旧ミルチアへの回廊が開いたってことじゃないですか。

観測班なんか、てんやわんやですよ！

シオン： だったら、こんな所で油売ってる場合じゃないでしょう。

ミュキ： そんなあ、せかく先輩をいちばんにお出迎えしようと思ってたのにい——

ネピリム『—————』

シオン： ！

あなたは——ネピリム？

ネピリム『—————』

ミュキ： ——先輩？ せんぱーい！

シオン： ——ああ、ごめん——なんだっけ。

ミュキ： なにって——局長が重要なお話があるって言ってましたって——
どうしたんですか？ 具合でも悪いんですか？

シオン： ううん、なんでもない——

ごめん、疲れたからちょっと休みたいの。

アレン： あ、じゃあ、局長の所に顔出したら、そのまま部屋に戻ってください。

報告書はこっちで提出しておきます。

シオン： ありがとう、アレンくん。お願いするね。

（ネピリムー今度は、なにが動き出したのー？）

— 

マーグリズ：あと 107 時間で、旧ミルチア宙域へ到着いたします。

教皇セルギウス『ミルチアと委員会に動きがあるな。ヴェクターが一枚かんでいるとの情報もある。

ー抑えられるか？』

マーグリズ：お任せを。足並みの揃わぬ連邦など、我々の敵ではありませんまい。

（ザルヴァートルとミルチア自治政府、クーカイ・ファウンデーションが一枚岩とは、到底思えぬがなー）

教皇セルギウス『ーマーグリズ。』

マーグリズ：はー

教皇セルギウス『私はお前を買っている。審問官としてではなく、同じ目的を持った同胞として、
忠誠のほどを私に見せてほしい。ーわかるな。』

マーグリズ：ー心得ております。

ペレグリー：ご老人、焦っているようね。

マーグリズ：ゾハル争奪戦ー抜きこんでいるつもりだったのが、気がついてみれば、
他の勢力と対等な競争状態だからな。これというのー

ペレグリー：アルベド・ピアソラーあの男のせいね。

マーグリズ：そうだ、奴め。こちらからの連絡にも、沈黙を保ち続けている。

ペレグリー：決別は必至と思っていたけど、意外に早かったわね。

マーグリズ：ああ。少なくともゾハルを確保した後と思っていたがー
そのような功利に基づいた判断を奴に期待する方が、愚かであったということだな。

ペレグリー：どうするの？

マーグリズ：艦隊は用意した。だがー各勢力の抑えにまわさねばならん。
それにーE. S. に大兵力をぶつけるなど、さらに愚かな行為だからな。

ペレグリー：つまり、イサカルが必要ということね。

マーグリズ：いや、リヒャルトとヘルマン、あの二人を使わせてもらおう。
二人の機体と、奴のシメオンはみな E. S. ー勢力比は二対一、だ。

ペレグリー：パイラムとスキュータムを？

アニマの器が組み込まれるべき、本来のガドとヨセフは、いまだ復元中のはず。

A. M. W. S. に組み込んだところで、所詮は代替品。E. S. としての完全な性能が発揮できるわけでは――

マーグリズ： やってもらねばならん。

異端審問官としてではなく、俺の手駒として生きたいとあの二人も望むのならな。

ペレグリー： ――――

曙光 🌄

シオン： ふう――まさかとは思ってたけど、局長の話って――新しい辞令とはね。

連邦主星[フィフス・エルサレム]で、新設される三局分室の室長――

悪くないどころか、嬉しくてしょうがないはずなのに――

（なぜ――なにが心に引っかかっているの？

ダメ――頭が働かない。私、疲れてるのかな

アレンくんがレポートまとめてくれてるはずだし、ちょっと休もうかな――

シオン： （――――
―――）

??? 『―――シオン。
――シオン。』

シオン： だ――れ――

シオン： ――ここは？

これは――ゾハル！？

フェブ――あなたなの！？

フェブロニア： シオン――

シオン： フェブ――いったいどういうこと？

ここはどこなの？ なぜ、あなたはここにいるの？

フェブロニア：ここが――私の妹たちが囚われている檻。

ゾハルのために造られた、冷たい牢獄。

シオン：ここが――でも、二人は――彼女たちはどこにも――

フェブロニア：シオン――この檻から彼女たちを助けて。

人が創り出した呪縛から妹たちを解放してほしい。

シオン：でも、わからない――ここはどこなの。どうやって助けるの。

フェブロニア：あなたは――必ずここに来る――

お願い、シオン――セシリーとキャスを――

シオン：まって――フェブ！

シオン：――――フェブッ！

ネピリム：――――

シオン：ネピリム――――

やっぱり、あなただったの――

教えて、フェブはいったい、なにを伝えようと――

ネピリム：彼女はあなたを待っている。もう時間がないの。

シオン：待ってる――？ あの夢の場所で――？

ネピリム：――シオン。

あなたは行かなければならない。そして、そこで重要な決断をすることになる。

それが彼女たちと、そして、あなたのため。

それはあなたの過去と未来にとってとても大切なこと――。

シオン：重要な決断？ 過去と未来って、どういうこと？

ネピリム：道はすでに開かれたわ。彼女の願いをかなえてあげて――

シオン：道――――

旧ミルチア――なのね。あそこにフェブの妹たちがいるのね。

ネピリム：シオン――急いで。”彼”がふたたび、ウ・ドゥと接触する前に――

フェブの――彼女の妹たちを――

シオン：彼――ウ・ドゥとふたたび――アルベドのこと？

ネピリム：シオン、急いで――

シオン：ネピリム――

（旧ミルチア――きっと、Jr. くんたちがアルベドを止めてくれるはず

私は連邦主星は行かなくてはならない――

でも――――

わからないよ、フェブ――私になにができるの――

-----）

『――メールを着信しました。』

シオン： メール――こんな時間に？

！ これは――――

クーカイ・ファウンダーション 

ガイナン： ――すまなかったな、連絡もできずに。

Jr.： ガイナン！ 心配させやがって――

シェリィ： ご無事の帰還、安心いたしました。

ガイナン： すまない――グノーシスの影響で、どこも U.M.N. が混乱していてね。

状況を連絡することもできなかった。

Jr.： だとしても、俺にも返事できないぐらい、忙しかったのか？

ガイナン： ――ザルヴァートルの動きを洗っていたものでね。

Jr.： ちっ、死んだ親父の残党どもか。

ガイナン： 彼らのもとには、U.R.T.V. のデータも残されているはずだ。

念話といえども、傍受の危険性を考慮しないわけにはいかなくてね。

Jr.： なるほどな――それで、なにかわかったのか？

ガイナン： ああ、かなり強引に艦隊が編成されている。その意図するところは明白だろう。

Jr.： 連中も旧ミルチアの出現に色めき立っているわけか。

いよいよ、こっちも遅れるわけに行かなくなってきたな。

――エルザの準備はどうだ？

メリィ： ぼちぼち終わる頃ですわ。

Jr.： ようし、尻尾つかまれる前に、先に走り出さねえとな。

ガイナン： ああ、ファウンデーションの方はまかせろ。思いっきり暴れてこい。

Jr.： お、珍しく煽るじゃねーか。よっしゃ、しばらく留守番してた分も働いてもらわねえとな。
んじゃ、行ってくるぜ！

ガイナン： ああ、まかせてもらおう。

（ふふふ——相変わらずお前は、扱いやすい子だよ、ルベド）

カナン： ——出発するのか？

Jr.： ああ、いよいよだ。十四年前、あんたに助けてもらった惑星へ行く。

カナン： そんなこともあったな。

Jr.： まだ傷は癒えてないんだろ。

E.S. は俺たちにまかせて、あんたは自分の任務のことだけ、考えててくれよ。

カナン： ——了解した。だが、E.S. の力を持てあますなら、すぐシートは返してもらおうぞ。

居住エリア

Jr.： モモ、今回は危険な旅だ。本当は残っててもらいたいんだが——

モモ： いえ、行かせてください。モモのナビゲーター特性を利用すれば、

他勢力に観測されずに、旧ミルチアへ転移できるはずです。

——ううん、そうじゃない。モモ、行ってみたいんです。

パパがモモを産み出してくれた惑星[ほし]へ——行かなきゃならない気がするんです。

Jr.： ——わかった、無理はするなよ。なにかあったら、俺やおっさんを頼ってくれ。

モモ： はい！

隔離格納庫エリア

ケイオス： いよいよだね、Jr. 。

Jr.： ああ、俺はきっとまた、あそこへ行く日が来ると思ってた。遅すぎたくれーだよ。

ケイオス： ——E.S. の力に溺れないで。それさえ気をつければ、大丈夫。

Jr.： ——どういう意味だ？ いや、ケイオスがそう言うんなら、聞いといた方が良さそうだな。

わかった、覚えとくよ。

ブリッジエリア

Jr.： ミルチア行きは、あんたには関係のない話だ。

——と言っても、無駄なんだろうな。

ジギー： 無論だ、モモの護衛はまだ完了してはいない。

Jr.： ——今回、俺はモモの方まで気を遣ってやる余裕がないかもしれねえ。

いざという時は——よろしく頼むぜ。

ジギー： 承知した。Jr.、お前は遠慮なく、兄弟との決着に専念するがいい。

ドックエリア

モモ： ママ————

ユリ・ミズラヒ： 出発前の忙しい時に、ごめんなさい。

Jr.： いいんだ。モモ、俺たちはブリッジへあがってるぜ。

モモ： はい——

ユリ・ミズラヒ： 状況を見るに、旧ミルチア行きは急を要するようね。

モモ： はい。

ユリ・ミズラヒ： ヘルマー代表から聞きました。あなたのナビゲーター特性が、今回は不可欠だとか。

モモ： はい。

ユリ・ミズラヒ： とても危険ね——

でも、私一個人の感傷で星団全体を危険にさらすわけにはいきません。

だけど、あなたにだけは私個人の気持ちを聞いてほしい——

モモ： はい。

ユリ・ミズラヒ： ——そんなに堅くならないで。

モモ： ママ————

ユリ・ミズラヒ： いえ、そんなことを私が言うのも自分勝手というものね。

あなたとの対話の機会を、もっと作るべきだったのだから。

モモ： ママ————

ユリ・ミズラヒ： 自分でも不思議なの。なぜか、あなたを行かせたくない。

モモ： ママ——モモも、いろいろ、お話したいことがあるんです。

ユリ・ミズラヒ： 彼——ジグラットの言った通りね。あなたとサクラは、まったくの別人。

モモ： ジギーが――――

ユリ・ミズラヒ： ルベドに教えてもらったサクラは意外とお転婆だったし――

あなたはよく気がつく、しっかり者。――だからこそ、もっとよく知りたいの。

困難な任務だとは思いますが。けれど、必ず帰還するように。

――待っています。

モモ： はい。必ず――必ず、帰ってきます。ママのところへ――

エルザ 

Jr.： お、懐かしいなあ。中は前のエルザのまんまじゃねえか。よくここまで再現したもんだな。

マッシューズ： 再現もなにも、中身は全部そのまんま、持ってきたもんですからね。

懐かしくて当然でさ。

Jr.： はあっ！？ なんだそりゃ――せっかくのローエングリン改級だぞ。

内装のグレードも上がってんのに、なんだってわざわざ――

マッシューズ： ちび旦那、わかってませんね。こいつのスピーカーやアンプは特注品なんでさ。

内装を変えたら、チューニングやり直さなきゃならないんでさ。

トニー： そのご大層なので聞いてんのがスパイスシスターズなんだから、しょうがねえよなあ。

マッシューズ： るせえ！ 余計な世話だ！

Jr.： しっかたねえなあ。

まあ、余計な改装費用は、今回の運賃の前払いってことにしといてやらあ。

マッシューズ： そ、そんな殺生なあ――！

モモ： ？ なんの話をされてたんですか？

ジギー： たいした話じゃない、気にすることはない。

モモ： ー？

Jr.： さてと、じゃあ出発だ。

モモ： はい、ナビゲートは任せてください。

ハマー： ファウンデーション管制より、出港許可、出たっす。

マッシューズ： よし、トニー。――出せ。

トニー： アイサー。低音噴射で微速推進。

モモ：ファウンダーション・メインゲートまで、あと10秒。

8、7、6、5、4――

3、2、1、ゲート通過！

トニー：よっしゃ、ロジカルドライブ起動！

ケイオス：！

待って、これは――

マッシュズ：な、なんだ、カーゴブロックから？

カナン：これは――アニマの器の干渉か。

モモ：！ 後方170から高速で接近する物体があります！

Jr.：アシェルで出るぞ、来てくれ、ケイオス！

モモ：接触まであと5秒！

ケイオス：Jr.、これは――――！

モモ：未確認機、前方300で静止しました。

いえ、この機体は――機体の識別を確認、――ディナです！

――

シオン：よかった、間に合ったみたい。

Jr.『その声――シオンか！ KOS-MOS もいるのか！』

KOS-MOS：はい、フロントシートにいます。

モモ『来てくれたんですね！』

Jr.『助かるぜ、二人がいれば、百人力だ。』

アレン：さらに、僕も来てるんですよ。

Jr.『そっか、なら百と半人力だな。』

アレン：は、半人力――

シオン：ミルチアまで乗せてっていただけると助かるんですが、カーゴブロックにお邪魔していいかしら。

マッシュズ『おう、いまハッチを開けるから、待ってろ！』

ハマー『カーゴベイハッチ、完全開放。進入、いつでもどうぞっす。』

シオン：KOS-MOS、お願い。

KOS-MOS：了解しました。最微速で前進します。

ー

シオン： ケイオスくんー

ケイオス： ーーーシオン、ヴェクターの通常業務に復帰したんだったよね。

シオン： ええ、でも安心して。ここへ来たのは、業務命令よ。

『KOS-MOS、並びに E.S. ディナをクーカイ・ファウンデーションのオリジナルゾハル探索任務に貸与する。シオン・ウヅキ、アレン・リッジリーの両名は KOS-MOS 及び E.S. ディナのバックアップ、保守を担当せよ』 ーですって。

CEO の署名が入った書類なんて、初めてもらっちゃった。

ケイオス： （やっぱり、そうかー）

シオン： どうしたの、ケイオスくん？

ケイオス： ごめん、なんでもない。また一緒に旅ができて嬉しいよ、シオン。
（どうしても僕に、決断させたいみたいだねー）

ブリッジ

トニー： よう、シオン。おひさ！ 来てくれて嬉しいぜえ。

ハマー： これでまた美味しい食事にありつけるってもんっす！

マシューズ： お前らなあ。

シオン： ふふーカレーでよければ、いくらでも。

マシューズ： お、ほんとか！

Jr.： よかったのか、シオン。

シオン： ええーいままでは巻き込まれただけだったけどーこれからは違うわ。
ヴェクターの社員として、私個人として、最後までつきあわせてもらう。
ーよろしくね。

Jr.： ああ、こちらこそ。

よし、ほんとのほんとに、全員そろったぜ。船長、出してくれ！

マシューズ： 了解でさ！ おい、トニー！

トニー： アイサー！

曙光

緋い外套の男： シオン・ウヅキと KOS-MOS は、クーカイ・ファウンデーション籍の貨客船に合流したようです。

ヴィルヘルム： そのようだね。すでに鍵は解かれた。あとは――彼女次第だ。

緋い外套の男： うまく事が運びますでしょうか？

ヴィルヘルム： 彼女は適合者だ。――問題はないよ。

人は往々にして、”善”と”悪”の二者択一の生を歩もうとする。

悲観をその基盤とし、不幸と悲哀を尊ぶ。

そんな、より善き精神[こころ]を求めようとね。

だが、それは他者との比較によって生まれる、単なる自己の価値観に過ぎない。

他人を思う彼女は”是”なのか、鍵を開いた彼は”非”なのか――。

その本質を理解し、心理を得るのは、さらにその先にある場所に立つことができる者のみ。

KOS-MOS[かのじょ]の目覚めは、その高処へと我々を導いてくれる。――そうなのだろう？

緋い外套の男： ――――

ヴィルヘルム： いずれにせよ、幕間の時間は終わり、役者は舞台に立った。

緋い外套の男： ええ、主役たちだけでなく、敵役[かたきやく]たちもまた――

ヴィルヘルム： しかし、彼らにはもう少し、自分の役どころを理解してもらう必要があるね。

緋い外套の男： 演技指導をせよ、と――？

ヴィルヘルム： それは、僕だけでなく、君たちの望みをかなえるための途でもあるんだよ。

緋い外套の男： ――心得ております。

蒼い外套の男： ――――

黒い外套の男： ――――

第二ミルチア

ヘルマー： ――――

??? 『驚かせたようだな、ヘルマー。』

ヘルマー： ――ああ、それが目的なら、大成功というところだろう。

まさか、生きているうちにふたたび、君と言葉を交わす日が来るとは思わなかった。

ユーリエフ『音声のみで失礼するが、これは冥界からの通信ではない。それだけは保証しよう。』

ヘルマー：（十四年前、ニグレドから聞かされた話が誤っていたということか。いや、この男の場合――）

ユーリエフ『旧交を温めなおしたいところだが、その余裕はない。』

現在、星団連邦軍が急遽編成した起動艦隊が、タンタス腕へ向かっている。

あと 83 時間でそちらの鼻先を通過することになるだろう。』

ヘルマー：ほう、こちらへの事前通告はなしにか。

連邦法第 16 編 72 章 2031 条に抵触することになるな。

ユーリエフ『通告なら、3 時間後には発せられる。そう杓子定規になるな、ヘルマー。』

ヘルマー：――不愉快ではあるが、話は聞こう。

ユーリエフ『なに、共同作戦を提案したいのだ。悪い話ではあるまい。』

察しの通り、艦隊はザルヴァートルの息がかかったものだ。

そして、その目的はオリジナルゾハルの確保にある。

君もすでに、同様の手は打っているのではないかね。』

ヘルマー：（この男――クーカイ・ファウンデーションには、どの程度の影響力を持っている？

まさか、こちらの手の内がすべて知られているのか――）

ユーリエフ『提案のひとつは、互いの戦力が協力し合うようにという要請だ。』

我々の艦隊と君の手駒が争わないように――というのは、君にも有益な話だろう。』

ヘルマー：――なるほど、傾聴に値する。

ユーリエフ『それでもひとつは、水先案内人を貸していただきたい。』

ヘルマー：――ほう？

ユーリエフ『旧ミルチアは、あれ以来、様々な危険が巣くう魔窟となっているのだろう。』

こちらとしても、事情に詳しいアドバイザーを切望するものでね。』

ヘルマー：なるほど、心当たりがないでもない。検討の上で迅速にお応えする。よろしいか？

ユーリエフ『かまわんよ。艦隊が君の頭上を通過するまでに返事をくれればよい。』

――――では。』

ヘルマー：――――――

???：――まるで、私がこの場にいることをご存じでいるかのような、お望みでしたね。

ヘルマー：まったくだ、大尉。

ジン：たしかに、あの人ならば、透視能力くらいは持っていそうだ。

少なくとも、黄泉から帰還することに比べれば、たいした力ではありませんからね。

――――さて、私は家に帰って、出発の準備をしてくるとしましょう。

ヘルマー：――行ってくれるか。

ジン：カナンにインプットしたデータの解析―――幾度も試みてこられたのでしたね。

ヘルマー：その通りだ。十四年間、すべてのアプローチが失敗に終わっている。

ジン：十四年前、ラビュリントスでU-TIC機関と争った私は――
戦いの中で、データディスクを失ってしまった。

そのことまで予期して、カナンに託したわけではありませんが―――

ヘルマー：今ではそのバックアップのみが、真実へと近づく唯一の手がかり――というわけだな。

ジン：彼は――カナンは、すでに出立したのでしょうか？

ならば私も、自分のなすべきことを果たすのみです。

ヘルマー：すまない―――

いや、感謝する――大尉。